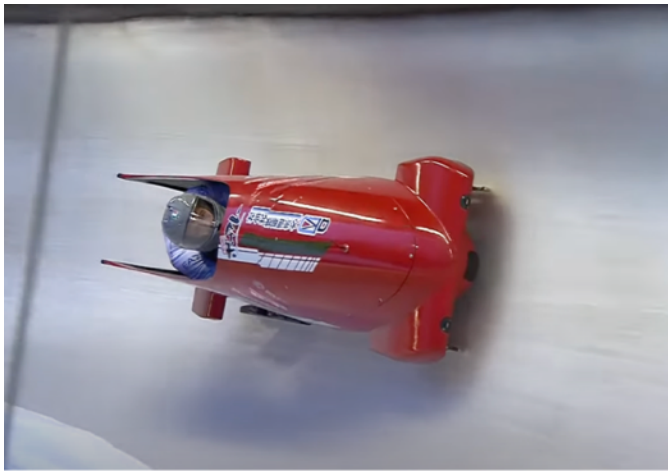
2025年1月22日

各位

下町ボブスレープロジェクト

下町ボブスレー、6年ぶり新カウルでワールドカップ参戦

　下町ボブスレープロジェクト（黒坂浩太郎委員長＝三陽機械製作所社長）は、国際ボブスレー連盟（IBSF）主催「IBSFワールドカップ」の2024-2025シーズンに、新型カウルを搭載したニューモデルを投入し実戦テストを進めています。さらに同じ形状で材質の違うカウルも製作中で、滑走性能を比較し1年後に迫った2026年イタリア冬季五輪に向けてソリの完成度を高めていきます。下町ボブスレーがカウルを新規製作したのは、2018年の韓国・平昌冬季五輪以来6年ぶりです。



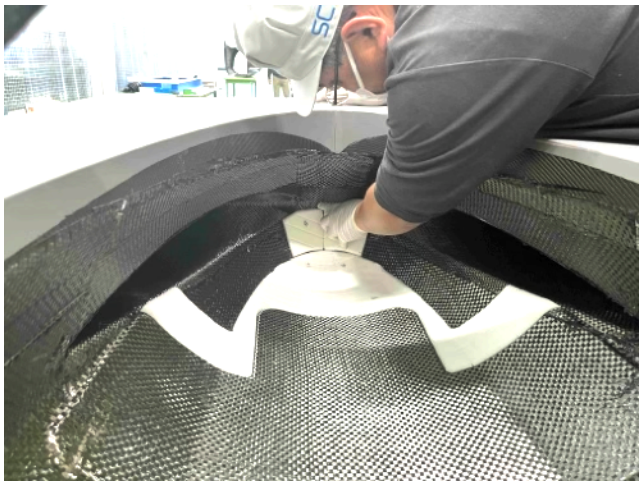
W杯ウィンターベルク大会で滑走する新型カウルの下町ボブスレー（国際ボブスレー連盟のYouTube中継より）

　新型カウルは、そりを共同開発しているドイツ人技術者ペーター・ヒンツ氏が形状や材質に関する要望をまとめ、東レ・カーボンマジック株式会社（滋賀県米原市、奥明栄社長）が型を設計、同社関連会社の株式会社SCT（群馬県伊勢崎市、下田順彌社長）で成形し、大田区町工場が関連する金属部品を製作しています。

　まず炭素繊維強化樹脂（CFRP）製の1号カウルを、2025年1月4日にドイツで開催されたワールドカップ・ウィンターベルク大会から投入しました。下町ボブスレーのそりは、イタリア代表のバリオラ・マッティア選手が2021-2022シーズンの後半から使用しており、シーズンを通しての実戦利用は４年目。今シーズンも欧州各地のワールドカップを転戦しており、新カウルで臨んだウィンターベルク大会は19位、1月11日のスイス・サンモリッツ大会は15位、1月18日のオーストリア・インスブルック大会は18位でした。

　下町ボブスレープロジェクトでは引き続き、天然由来の亜麻繊維を使った強化樹脂で同じ形状の2号カウルを製作します。ボブスレーはサスペンション性能がほとんどなく、フレームのたわみのほかカウルも振動吸収の役割を果たすのではないかとの意見があります。今回のテストでは硬い炭素繊維と柔らかい亜麻繊維で滑走性能に違いがあるかを検証します。また、天然由来の繊維を使うことで、豊かな自然のなかで競うボブスレー競技を通じて「環境」の大切さをアピールできればと考えています。

下町ボブスレーは大田区を中心とした町工場が部品を無償製作したそりで冬季五輪出場を目指すプロジェクトで、2011年に活動を開始し2018年の平昌冬季五輪までに10台のボブスレーを作りました。平昌五輪後はペーター・ヒンツ氏と共に10号機のフレームをベースにステアリング機構や足回りなど各種の金属部品の改良を重ね、性能を熟成してきました。

カウルは平昌五輪まで東レ・カーボンマジックの協力でモデルごとに刷新してきましたが、平昌五輪後はフレームの熟成がメインとなりカウルはペーター・ヒンツ氏が所有する市販品などをテストしていました。フレームがほぼ熟成したことから、イタリア選手・監督やペーター氏から2026年イタリア冬季五輪に向けた最後の開発課題としてカウル新規製作の要望が上がっていました。

お問合せ　広報担当・奥田耕士
（okudak@smallfactory.net、080-3437-5024）